

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

1

突 社

案

★ジャモ
日本人には気食があるが
アイヌには気食がない

藝術の個人的内面は情緒と実感を精神の中に美的要素として融合する
藝術が個人的主観の中に美的要素を多分に用ひ出すとき、藝術は常に新たな排出を觀念の所有して
める創造と表現とに実現する。特別の心理過程を藝術のもつ美的意識は統制して組織そのもの
の中に自由運動を起す場合に主観の内面は非常に重要なものである。
藝術が氣拍末に主観の理想と揚する程、藝術のもつ精神的意識は整理される。美的認識が行動的
直接に精神的運動を簡明に示し出す程、藝術のもつ精神的意識は整理される。美的認識が行動的
感覚と平衡する時、便値も再美的運動のしく免れず、この整理理由は内面と歩行が時間的運動を得て
同時やれと変りないもの、藝術的運動の内面が理想化され、自然の藝術的形式が美的認識に依拠し
た時、主観の永遠建設であり生活の目的の構想である。その目的が強固な力学的引力を以て埋没しやうとする人主たる
が創造の運動へとより、世に促進される。その目的が強固な力学的引力を以て埋没しやうとする人主たる
非常な熱意になり主観の領域を収斂して高速度に前進する。そこに藝術の行動的社會があり、在る観がある
だ。姑息な自己執着偏愛を排除して藝術の功利的意識を藝術の中にのみ、その藝術を二次的藝術至上
主義として政治的解別に追深く入る。その目的が強固な力学的引力を以て埋没しやうとする人主たる
藝術。正義の感懐は藝術の内部的動因となつて現象性をも多量にもつ時、自己創造となり、二次的藝術至上
主義は自壊して生活と藝術がハタリ合した明瞭な社會性を中心体としてくるのである。
故に藝術のもつ美的意識は過去の歴史的再現ではなくして、模倣ではなくして純粹な活動能力となつてくるので
ある。所謂意志と行動の直接なる表示となつてくるのである。

強い反抗を燃せ！
そしてその反抗を實感と藝術要素をもつ熱情に依つて
社會目全体に及ぼすべからぬ。

高瀬勝男



地方へ熱望

藝術は彼等自身の具現者である。同時に彼等自身はまた、現在及将来の藝術運動の方向へ、勇敢な大膽で、學問と知識をもたねばならない。彼等自身の正義、都市及び地方の、より地方的な結合を求めた藝術運動を起さなければならぬ。その小作農民運動と労働運動とは、兩面運動、一層羽博いこの空間を飛躍せしめるべきである。都市ははるかに小さい市民生活の道は、都市の隅々、現実の世帯へとあはで出す土民の民衆的な不消化の困憊から、夢とも知れない無数の精銳がでる。現在の社会から、次の社会を生み出し形成してゆく、いかに地方的な新運動が起つてくる。地方の都市的なるより地方的なことを志し形成してゆく運動である。この二つの分野に生れる。またその分野も形成してゆくものなり。藝術はそれらの集小團體運動にまで動き進軍する。これより今より起つてくる藝術運動は、詩人・音楽家・劇作家・小説家・画家・批評家は一丸となつて主要なる近代への光明である。暗つた金先びな、精力消耗を生めるい詰歌を画も衆語を小説を劇を画も書かざるべきでない。古今への序章はこれまでの画と歌や詩人によつてもう泥田知、百姓は種を蒔いては出ない。勝もあるべきでないか。公衆は出座を怠るはかない。昨原は、新原へ出る。圓い顔、首の太いカサリとした肩の太きい男達よ。君は若く自身をやうなものを描かないか。圓い顔、首の太いカサリ都市には都市らしい優れた技巧、感傷的な構想的、極端的な一般に反響性のない洗練された素朴な質がある。地方にはあつたない詩人また、また何故もある人々には豊満な顔が、初め彼等はそれを見られてゐる無口な屈從的な態度を捨てた。今は過をなかつた。既に労働学校と農民学校は盛つた。農民及び労働者詩人はこれより無数のカサリカサリの血をわきまへた仕事としてゐるか。若しその彼等が無能な日はツルハンや銅鑼が、突いて、た、実に文藝家藝術の傑作を成就するかもしれない。

三野 混沌

新らしき時代の前衛

時が来た

農民よ

地下室の蓋を開けろ！

そしてバレイシヨを取らせ

どんなにどんなにどんなに

バレイシヨは春を待ちあぐんでゐたことか

ひよろひよろと

ひよろひよろと

どれこれもひよろひよろと

度せひよろけたバレイシヨ

あの芽

時が来た

農民よ

地下室の蓋をあけろ！

猪狩直は北海道の百姓である。

屈まなく

暗くなるほど燃えてゐる

深い深い空に

ぶちこめ

石癪のやうにまろくなつてゐる
さうして花のやうな花か
のちからうとしてゐる。

三野混池は諸島県の百姓である。
おま、そんなそんな車座になれ、僕達は此の感
激を分け合はうではないか。先づ今夜の会合には、「混池たる農民問題」の筆
福田徳三博士を主賓として、僕達は石がねにならぬ。次に那須博士を、次に当局
の農政問題係の諸君を。

おまは行てや一を扶け
やつと歩いてゐる。鋤をとつて、代つたが
握つてゐた柄は熱い。
おれは元井を向いて、恥を叩いて
喜ぶにむせもた
喜ぶに出たちからはかきりなくおれたちを
鋤きまどるだ
鋤をまどるだ
おれだちが思は
この喜ぶからつくろふだ（三野の問答者より）

おま、この喜ぶから、おれだちが世界はこの喜ぶからつくろふだ。此喜ぶを創出する奴は何
物だ、尊い労働の生果を掠奪し、自由の原野に鋤をかぶす野武士共は何者だ！ 額

に汗して自ら生産し、自ら消費する。かくばかり自然にして、出来高嚴密な生活は他にない
自らの眼を得れば、即ち行つて同僚を助ける。かくばかり美しい行為は他にない。互助互助の
精神、友愛的同僚精神、これこそは新社会の創造的方面に於ける道徳的基礎で
なければならぬ。当來社会の根本精神は一語に盡す。「ある人々の幸福
のために万人が苦役する。現在の如き社会ではなくして万人の幸福の等しく保証せらるる社
会であるべき筈だ。」とこから手をつけていかからぬ筈と幽霊の聲を公然言つて
居られる福田博士の如き、僕達から見たり、飯を喰つて居らず、我々が死んで生命をつないで
おられる人とは思はれぬ。誠に白い手の臘人形である。何と言ふ筈か、知らずの連中であり
う。農民の問題は不断の生活の事実である。名論卓説、此等が果して何物であるか、徒
らに抽象的用語を駆使し、徒らに理論的思辨に没して、不生産的な學究の徒の手淫興
味を充足するに止まる様な態度は断じて許さる可きでない。

（断絶）

理想社会に於ては、万人が万々必要物資の生産労働に従事する経済的基礎、即ち道徳
的基礎を持ち、一切の文化、文明、即ち教育、藝術、科学、宗教等は、その経済的組織の
上に打樹てられねばならぬ。先づ住食衣の確保の上に、總ゆる人間欲求が花咲き結
実する。農民階級の問題は農民階級自ら之を處理する事だ。農民階級同時
階級のために何時迄も繰返してはならぬ。一將功成万骨枯の愚を、かれ等々
僕達は熱い火の様な力が奮動として農民階級の中から、農民自身の階級の中から勃興し
つつある事を感して居る。何をいふ鈍問な物の言ひ振りであらう。事実、炎々して、

總ゆる巨大なる建物をも焼かんとする惨火が燎原を紅に染めて居るのである。(漸徐)
「野の白百合を見よ、彼等は時かず耕さず」僕等は既に野に白百合の花を見る
事も出来ぬ。譬へ白百合は清絶な姿を以て谷間にその美を誇らうとも、僕等
はその香はしい匂に陶酔し、その純潔な花の美に眞實から觸れる事も出来ぬ。
「見るだけではつまらぬ、喰べたら如何に甘美であらう」喰べられぬ物は悉く美ではない。
賤民根性と笑つてはならぬ。僕等の受けた教育は常に反対であるかの如く「虚偽の假
面の下に於て育まれ、卒直に人に語れば免れず」と思ひに思はれる節々が夕いのである。乃て
僕等は大胆に言ふのだ。喰べられぬ物は悉く美しくはない。乃て僕等は大胆に言ふのだ。
時かぬ種は生へぬ。その時かく叫ばれる声には自ら切々の切きがある。「無い種は時けぬ」
この訴へこそは平民階級の總ゆる分野から放たれる叫喚である。無い種は時けぬ。
この叫びを指し自由人たりとする鍵はない。新社会の創造はこの一点の追究及び
拡大から初まる。自覚から發見へ、發見から團結へ、團結から行動へ。

のほりつめた山上だ
厭がふさつさうした
さらした
寔にすっぱたかた
この骨さらしに
ぬけ出やうもないんだ(三野氏聞望者より)

ぬけ出やうもないくらい土、僕は工民生活者混沌氏の暗澹なる叫びの中に、また

アロレンデナイソ

米無けりあ稲黍を

稲黍無けりあ馬鈴薯を

馬鈴薯無けりあ石ころ

レンゲを
お前は一度でも味ったことあるか(橋種者より)

北國の開墾者稻村藩直臣の生活の中に、新しい時代の前觸れを、前觸れと言は
ぬよりは生活それ自らの中に胎んで居る新興階級のカを、自ら中心となつて新社
会建設の方途に能動的に進出せんとする新しい生命力の躍動を感ずるものだ。その力
とは何であるか。即ち、革命的階級分子の行動を決定する「戦闘的行動」と「創
造的事業」の両者である。

手塚武

手塚武

自ら自らの首を吊る者は去れ

サイレン
時の警告笛はけたたましく鳴り響いてゐる
時間は何事を物語るのであるか

我々の闘争、獲得の目的行動は無限の恍惚を呼ぶ

僕達の闘争は束縛への解放だ！

戦闘行動を侮蔑する、あいつら自由主義者を放逐しろ！

美しき理想も亦僕達にとつては何物でもないのだ

確たる行為の前に言葉は如何に無力であるか

沈黙は叫喚と行動を胎んで緊縮する

来い！

自ら自らの歴史を創造する者は来い！

自ら自らの首を吊る者は来い！

愛は闘争の中に

平和は闘争の中にのみだ

歴史は闘争なき闘争の中にある

城塞高く白旗の翻るまで！

最後の一人まで！

兄弟達よ

人類の歴史の創られる新らしい黎明に立ち上れ！

言瀧 勝田力

屠殺所

肉がこまごまになつて

すつとぶ

うつたかくつまれる

ねぢれる

廻る

廻る

手か手か

無数の手が

空間に翳る

折り重なる

重なる

重なる

重なる

重なる

重なる

重なる

重なる

重なる

重なる

重なる

あ あ い

あ あ あ い

陰惨に呼ぶかけあうもの

声はしやかれて 杜絶た

くろつんだ肉塊

万本の指頭かけいんする

東と西と

北と南と

はた 死せる

あ あ

受かしのつる

骨と骨とが

ほきほき鳴る

中野勇力雄

樹

陽がゆれる

ゆれる大きな団体に弾力がつて

血が生氣が脈々と湧いてくる

もう眠るくあない

水が あああの音 遠くの山々で鳴り響いてる

晴れ晴れと明るくて

お世つたい程肉体がゆるむ

胎んでゐた力の芽は何処へでも能ひでる

笑ふときやつきゆつ歯が鳴る

石川武夫

晩春

帽子を脱いで青葉の下を歩いて行くと
向ふから

水色のバラソルをくるくるまわしやうやうくる女と襟元違つた——その途端
噴水のやうな女の視線にぶつかったので私はあはてて眼を外らした

私は止って

おケットから白いハンケチを取り出して
額の汗を拭いた

吾が木葉の道

疲勞

疲れ切つて

徳も

徳もなく

死んだ方が いいと思ふほど

前へでなほ疲れ足

すり加さず歩いてみる

こうした苦しみの上に

苦しみ

百姓

貧乏百姓は疲れ切つてゐる

たほゆるな

俺等は この中であつて 強く生きることは

赤銅のやうな

黒く輝く腕を

太陽も

さし上り

この腕を持つことは

大浦私圓郎

ある芝居

プラミットの尖端で輕業師が踊つてゐる
 昇り切つたところには生有い青い空だ
 輕業師は何か言ひながら乗しまゝに 踊つてゐる
 昇り切つたところば青い生有い空だ
 空から噴出した水がおどけける
 オイ、

何がそんなにもうれいんだい
水は地の上を走り下り歌ひ出した
歌ひをうひやミットをかこんだ
軽装束は何か歌ひをうひ踊り出した
昇り切つたところへ青い青い空へ

廿五

輕業師は瘦れた

觀客はそれから何を見たか

日付り切つたところは深い深い穴だ

高橋久由

死んだ双鬼の久二

おうの背中で 死んでいった久二は
 ようやく やうやく あんよの できる 二つの春 だった
 久二はおうの 望み 二つ 久二は 二つ

百姓でとても多量の足らないおりのうちでは兄に生れた久二をも
いふもありの北月中にゆつつけ

又、あんなほつ出ていくのだうた
おれはりやに留守番させて

いふおちうとから かゝたが、弱かつた久二は、二つになつても 第のシケヲに
いふもあんよをじやまされなかつた

ありあり久二にさんべんかおやまつてあつた

川林 賢

春

空屋になつた家が 幾軒もつく

終極に養はれた雲雀は

一本の屋上のアシンナツもの雨りはじめた

颯るのは雲だ

颯るのは雲だ

川林直人

世間は明るんだのだ

このうす暗がりの中を
真直に歩いた一本の道！
噫 幾億の魂が押し来めた道！

どぞ此処へ！
どぞ此処へ！
どぞ此処へ！
どぞ此処へ！
どぞ此処へ！
どぞ此処へ！
どぞ此処へ！
どぞ此処へ！
どぞ此処へ！
どぞ此処へ！

我々の進路をせめて、高層は叩き倒し
我々の進路をせめて、高層は叩き倒し
我々の進路をせめて、高層は叩き倒し
我々の進路をせめて、高層は叩き倒し
我々の進路をせめて、高層は叩き倒し
我々の進路をせめて、高層は叩き倒し
我々の進路をせめて、高層は叩き倒し
我々の進路をせめて、高層は叩き倒し
我々の進路をせめて、高層は叩き倒し
我々の進路をせめて、高層は叩き倒し

さあ！みんな

暮れだ！

夜空を散る感情

仲春の妖艶な月が毎夜
帝都の空を低く 燐々しく 横切り
深川のトツパツレ
海堤の水たまりの 蛇出類
おちおち切つた熱情に 終夜 燐々れて
おちおち切つた熱情に 終夜 呻いてゐる
深川のトツパツレ
昔長州の下屋敷の 跡
昔謀策に夜を徹した 跡
潮をふくんだ海風に 勢ひこんでゐる松林だ
九月の初めの
暗いたれた夜に 抱いて
香噴りした意恩を 抱いて
夜空をツツ切つてゆく月！
満月に なり切れない 月の意に 俺は毎夜 虫といつしよに 呻される
ヒロク／＼／＼／＼ 熱い熱情をこめて 夜をはなれて 幾分の矢
深川の黒い煙囪の 煙を 飛翔して 満月に なりきれない月の
おちおち切つた熱情に 終夜 呻いてゐる
吹けよ海風！
吹いて俺の感情を 帝都の空に 撒き散らせ！
砂塵に 濁つた帝都の 夜空高く 俺の感情を 撒き散らせ！

横田 卓十造

魂を盗みかけた女

千代公！

俺はお前の多かれ少かれ微笑を見た時
貧しい魂に 愛しい愛動をみたのだ
白い頬も 大空へ
向ける 振り向ける
あの怪しい眸は 雄猫が 好きなんだ
俺はメチャクチャな
フルジョーの 幻想に 悩まされた
俺の 詐画は どの中へ たたきめされた
かぶり火を たけ
かぶり火を

考へてみる

俺はどの中へ 大事な卵を 産み出した
真黒な光と赤い魂をもった卵だ

千代公！

お前はそつと 魂を 卵を

おたやかな武田と美しく下らない代償で盗まうとしたんだ
美しいサモ娘

お前にはこの魂は

全くみみずの腸と同じではないのか

お前には赤い魂を生か

情熱と生殖器とを捨てないはすだ

下を見ろ

血の川が 必ず黒い流れが

血を飲め 赤い赤い黒い

と黒い光り

必死の光線

それだけなり

お前たちの訪問服にもあるはずだ

中野大次郎

灰色の街は静かだ

校はいま

ひとしきり人類への埋葬曲に喧嘩をよめる

あふれるな —— 烈風だ！

眼下の道は一本だけ

広いゆつたりした街道をきりぬかれに動く影あり

市場へ商品が積んだ馬車

市場より商品が積んだ馬車

あふれるな

烈風だ！

彼らはいつまでもそのままであるであらう

一步 両足で跳躍だ！

九十山風節郎

稚梨

虚飾の頭を なぐりとばす——祭の夜
闇に吠へる和洋交換の建物

ガク——
轟くは

群衆の行進曲

群衆示

明日

今日

オ、俺の身体は

燃えて

燃えて

吹きおろせ——風

水かきろ——上水管

天上は火と水、つなみの野た

蒼やめた神輿が泣き乾んだ

直線

直線

街は安心して 地帯の眼を 燃る

松村 清

彼等の呼吸はみみずのやうだ

どふ板のやうに汗かいた寢室に

みみずかじとじと呼吸してゐる

彼等の眼病にやつれた生活——

恐ろしい無風

沈黙

褐色に粘つた夜空に

のろのろとふとり

のろ——つとけを吐いてゐる

煙突——

そ——と内股をたてた

地熱

炭壁は微生物のやうに汗かいてゐる

坑底の地熱にふけた

提燈は屈折もなく光臨に伸縮し 遠い爆破の音が山崩れてゆく——

闇の重層にもたれかかる微細な音響は

裸体を画いて風のやうにうごめいてゐる

声もないとよめき

沈黙してゆく深き

ぐんぐんと限りなくおちこんでゆく

圧殺された空気のゆに

俺は究極のやうなものを感じた

猪狩満直

雪の下から

くらしい冬

つめたい雪

よ、全く永かったでや
子供らよくも死にもしないで——

ああ

草・木・芽・花・小鳥・太陽

——皆に油切った百味面かできた

雪の下から

まっしろい雪の下からでできたまっくろい土

でできたまっくろい土

土——ぶっつかった

土——食った

土土土 ちゅちゅる

みんなこの匂ひに酔へ

今日今朝つかり

山原いっぱいの雲雀だ

詩人は死んぢやつた

——平の高瀬勝男に——

「眼から涙がでますわい」
或る百鬼が斯を切り取り言つてゐた
永いこと鍋の中には米豆少々と外米を浮かせてゐた彼が
詩人よ 死んぢやまへい！

詩人は死んぢやつた

俺が俺たちの中の

とて詩人が生れた

俺が俺たちの中に

その面はまゝつと百姓・職工は

土臭い
油臭い

——詩人は死んぢやつた

松本純一

よろけ

——坑夫よ、太陽はさんとしていまでも太陽だ——

くらい地精に酔はされ
おき出た肉は搾られ

よろけ

ひとりぼつちで置かれた空っぽのこの軀が

強靱な盤石をきり破り

身をひろけ 究きたす胸の二つの名に

お母なるその光りを飽かず貪り吸うことなり

脹らんじ熱に燃える水の

そのいぶきを隣りし合う

かたまつてくる精力の石火

よろけ
よろけ

土に培はれ
泥水でくんと。
も得た表情が
それ。

地熱を知てるか

なかい間の待ちぎれな

あの狂はしい静かな力の分曉を

その傷ましい目撃手を。

壊って赤く燃え残った像の指図は

かどのやうなほうす受の破片となり

感情の昇屈を極りたして声諸共には拳なる両手だ

——その目撃手に腹を肥せ！

柴野 基

無題

衝動 ピクピクピク

肉慾 愛情 血！

冬日珠殺された神経！

穴！ 彼は暖風をほらんだ

生！

生きることが最大なんだ

三野混沌

山嵐の夜

山嵐に香のひし

吐息とわけのわからぬ

激怒と涙で動く

ワサワサワサワサ

甚るかげから青い寒を無難作に表はす樹木と立つ

あらゆる控取と目撃者は

俺等の先だ

俺等を粉砕する

俺は大地に足をからみつけたまま首を刎ねられた虫だ

そして多数の奇物

この奔血にされた地は

奔血は決定的な弾弾

目撃者がなんだ

しつかりと方向づけろ

この首刎ねの瞬間から

小三點

中野勇雄

◇三野混沌詩集「百姓」

私は感想なり批評なりを著しく苦言の如か 今著しく力と時とがない

書目にて往々に散漫に終ることも「百姓」のために惜しむから

讀んでみて下さいと紹介せしに止める

たは詩集「百姓」は鉄板のやうにがんと響くであらうことを思ふ

その詩は力だ・行動だ・生活だ・ せしてはり裂けさうだ！

◇意識の現在

誰にでも聞いてみるかい 勿論眼鏡だ 眼鏡ですよ！

殊に色々かふなんて奴はいやだ

◇私信

田舎にみて淋しいことは笠居のやうなないことと うまいコトの飲めないことです

殊に春など街を歩いてる友・兄・姉のやうなことを考へてぼんやりしてゐます

でもあたりに何かやれないうちと自分のことなど考へてせうやるのも悪くもありま

せん

下らない詩なんでも書いたりしたくなくはなないと思つてます

それには新しい色でもねー

- 1 路傍詩 衣鉢を「突」立体につぐ
 日ホリ詩の肥料は満を持して立てる「突」のために他臓を突き破ったのだ
 たつた一つしかなかった心せうを——ひと皮むいて利はなれきつて了つた。
- 2 筑民・農民・漁民の領域に我々の足跡を刻み出すことは詩の地方化を意圖する今
 日におつて最も重要な問題だ
 殊に旅りこまふたまんまによく時代の運轉を指摘しつゝある筑民の生活実体は終
 極的には又此に新しい力強い反響と目醒ましき進展とを如何なく立證する運命だ
 我々の足跡に新しい名蹟の立体面を明確に把握と傳入する凡人の呼吸と認識
 せねばならぬ。
- 3 我々は詩人であることを我々の存在として常に忘却する
 この胸壁こそ爽快！
- 4 時間と空間を超越してあるという
 その人肉が時間と空間から立派な生存権をあたへてゐるところを見知ると
 晴れてきとうな皮肉がよくよく盛り上ってくる。
- 5 食慾それこそ新鮮に満足するため人工的な吐瀉法を用ひて然からしめ事実は心
 ない全盛の口々末期にはあつたかも知れぬが
 今の時代にも存在理由を保持してゐるのだ
 インテリゲンチヤの社會的相理地よ。
- 6 キヨロキヨロしてゐる奴はくたばつて了へ！だ、何処迄も。

俺等の世紀の夜 出雲の夜。

- 般石平詩集 七月刊行
 詩集 橋は空に生えた 中野勇雄著 近刊 同
 詩集 赤の班点 第二詩集 高瀬晴男著 近刊 定価三三
 歌集 榎木 松村清著 近刊 定価三三
 詩集 閑經者 三野混池著 既刊 定価一五
 詩集 百姓 三野混池著 既刊 定価一五
 銅鑼年鑑詩集 近刊 東京市外下戸塚町近工館銅鑼社
 定価五十五
- 福島縣平町田町六ニ安江發行

編輯後記

四月二日、文藝解放社主催「平の詩人会」後援で開催した文藝講演会は、急激に催したもので余り聴衆はなかった。文藝戦線連の講演会の時より少なかったのだ。然し、自懸命に盡力して働いたので会としては、氣持のいい会であった。アナルヒスト之藝運動としては最初の試みであった。

続いて五月七日、詩及脚本朗読会、それに、全日本新興詩人詩展覧会を兼ね開催した。詩展ととりまとめ送った中野宮の手塚武就島谷三、銅鑼社の草野心平、土方定一その他の諸氏にお礼をおく。草野氏は文藝開成の講演会後もずっと僕達の朗読会にこちらに来て働いてくれた。氏は高百階級の話をした。

二日共、聴衆は観覧者少なかったが仲に五六人の女學生がまじりにきてゐた。路傍詩、詩は十言で休刊、新刊に突、本誌を創刊、元氣発湧したものにしたい、印刷する金がないので手摺にした。皆必死になつてかかった。仲でも松本氏が努力したものだ。としとしゃやてゆく大同團結だ、原稿と金とくると都合いい。有る、磯会を用ゐて働かう。先住民詩と農民詩が得たこと強みだ（混池）

昭和三年六月一日
發行所 福島縣平町田町六二
松本純一
突社

突

昭和二年五月二十七日印刷納本
昭和二年六月四日發行
編輯人 福島縣平町田町六二 松本純一
發行所 福島縣平町田町六二 突社
印刷發行所 福島縣平町田町六二 突社

・錢20價額・

